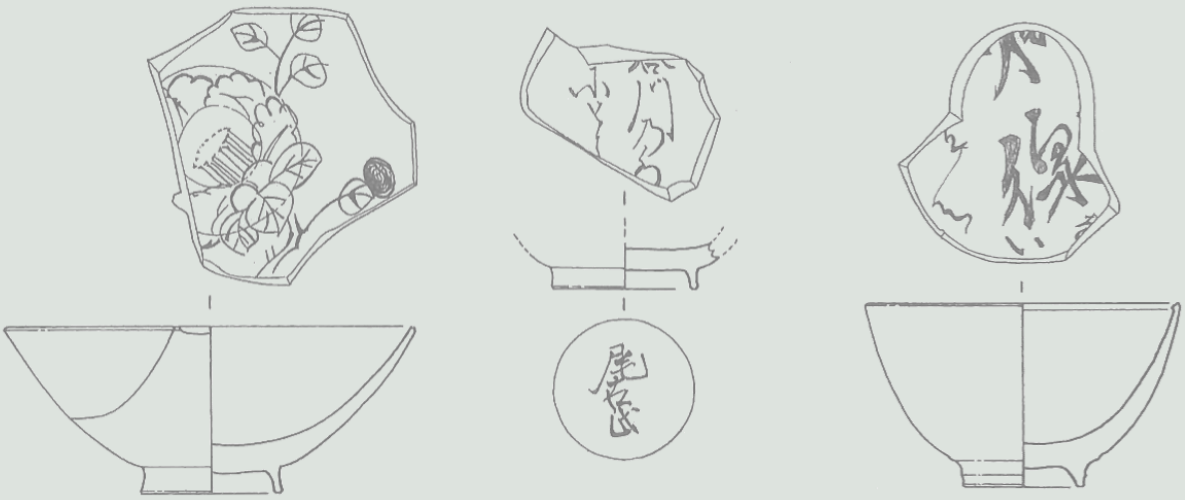
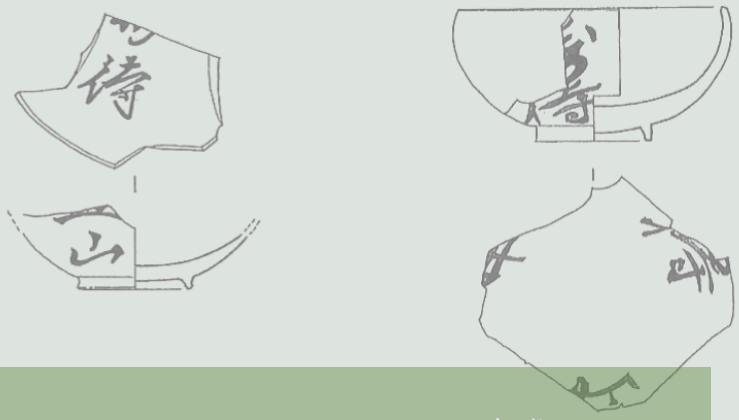


長与焼と長与三彩



長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷田尾（たお）に、現在も残る全長約115mの巨大な登り窯跡（長与皿山窯跡）は、寛文7（1667）年に浅井角左衛門・尾道吉右衛門・山田源右衛門・尾道長左衛門の願い出によって始まった長与焼の窯である。日用雑器の碗や皿のほか、白、黄、緑、黒などの釉薬を用いた高級品である長与三彩で有名である。

長与焼について

長与焼は、寛文7(1667)年の開窯から廃窯と再興を繰り返し、第1期から第3期の3つの操業期間があったことが分かっています。

第1期　寛文7(1667)年～元禄5(1692)年頃
第2期　正徳2(1712)年～文政3(1820)年
第3期　弘化2(1845)年～安政6(1859)年

第1期は寛文7(1667)年に始まり、何らかの理由で廃窯していますが詳しい事は分かっていません。第2期は正徳2(1712)年に同じ大村領内の波佐見稗木場から太郎兵衛という者がやってきて窯を再興し、文政3(1820)年まで続いています。寛延元(1748)年には窯を拡張し、長与皿山の陶工が天草や愛媛の砥部に技術指導に出かけたほど繁栄していましたが、焼物の値段が下がり経営が難しくなったため、文政3(1820)年に廃窯しています。第3期は長与皿山出身の渡邊作兵衛が再興しましたが、それまでの操業に比べると規模は小さく、安政6(1859)年には廃窯し、長与焼の歴史は終わりを迎えました。『大村郷村記』には、弘化2(1845)年に、皿山第3期目となる窯を再興した「渡邊作兵衛(さくべえ)」という人物のことが書かれています。渡邊家の墓碑は陶器の碑銘板をはめ込んだ珍しいもので、宝暦4(1754)年、俗名尾古助右衛門ほか数名の俗名・戒名が記されています。もともと渡邊家は波佐見の尾古家で、一時その姓を名乗っていて、平成5(1993)年調査時の焚口付近と推測される試掘坑からは、「尾古」の文字が入った碗も見つかっています。

長与焼の多くは碗や皿などの日用磁器で、原料に長与で採れる中尾土が使われていました。中尾土は操業を中止していた時期に、諫早領現川の陶工達に売っている記録があり、良質なものであったことがうかがえます。

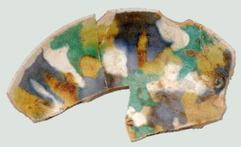
長与焼は長崎を中心に全国にも出荷されていました。大阪の淀川で酒食を売っていた小舟が使っていた器であるくらわんか碗としても利用されていて、淀川の川底から長与焼が発見されています。

長与三彩筒型花生

長与三彩茶壷

長与三彩香炉

長与三彩涼炉



平成17(2005)年に実施した調査で出土した長与三彩の平皿破片

長与三彩について

長与三彩についてですが、『大村郷村記』の中に、寛政4(1792)年、当村の市次郎という人物が、珍しい焼き物を焼いたので、畑2段を与えて他所に行かないようにとの記述があります。この焼物が、長与三彩を指すものと推測されてきました。長与三彩は、明確な制作年が不明であること、現存する伝世品の数が少ないこと、その製法が不明なことなどから、“幻の長与三彩”と呼ばれています。

昭和48(1973)年と平成5(1993)年には、登り窯地内において発掘調査が行われました。この調査では、ここで焼かれた製品の特長や窯の規模などが判明し、一定の成果をあげましたが、長与三彩の発見には至りませんでした。このことから、登り窯では長与三彩は焼かれず、近隣の別の地点で焼かれたという見方が強くなっていきました。この後、平成17(2005)年に実施した発掘調査では、登り窯に隣接する渡邊氏の宅地(調査当時・現町有地)から“長与三彩の失敗品”が出土しました。失敗品が出土するのは、生産地ならではの結果であるため、これによってますます長与三彩が、同地内で焼かれた可能性が高くなったと言えます。長与三彩は、長崎市内や大村市内からも少量の出土事例がありますが、失敗品のような特殊な長与三彩は、長与町での出土事例のみです。

発掘された長与三彩平皿破片からは、下地に白釉を用いて、その上に色釉(三彩釉)を施している状態が観察されます。調査を指揮した下川達彌氏(活水女子大学特別教授)によれば、この技法は、低火度釉で焼かれた京焼の色絵製品に使われていて、その源流は交趾(こうち)三彩にあり、肥前の色釉磁器の技法とは異なるものと指摘しています。また、この三彩の他に多量の素焼片が出土しており、中でもロクロ目が粗く残り、高台(こうだい)の断面が三角形のもの(三角高台)については、このあと、三彩釉をかける為につくられた製品であると、陶芸家の故横石圭外氏は指摘しています。長与三彩に使われる素焼については、小規模な素焼窯で焼かれていて、その窯で長与三彩を焼いたのではないかと考えられています。その理由として、三彩焼は、それぞれの色が発色する温度が微妙に異なる2色ないし3色以上の釉薬を良い状態で発色させるのが、大規模な窯では難しかったと考えられること、焼成が比較的低い温度で行われる為、登り窯のように温度が1,300℃前後に上がる環境で作られたとは考えにくいことなどが挙げられます。

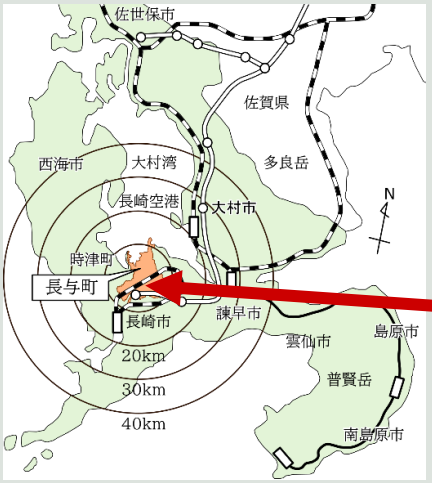
ちなみに、『大村郷村記』の長与村の記述の中に、渡邊作兵衛が、弘化2(1845)年に窯を再興し、3軒ほどの小窯を仕立てたとの記述がみられることからも、同氏の敷地内には、やはり何らかの窯もしくは工房があった可能性があります。また、登り窯には、それに付随する形で、釉薬をかける場所や、ロクロ挽きを施す場所、水簸(すいひ)を行う場所等が必要になるため、それらの工房跡が、窯の周辺に残っているはずですが、現在の登り窯跡では、窯本体と物原(焼き損じの製品などの捨て場)しか確認さ

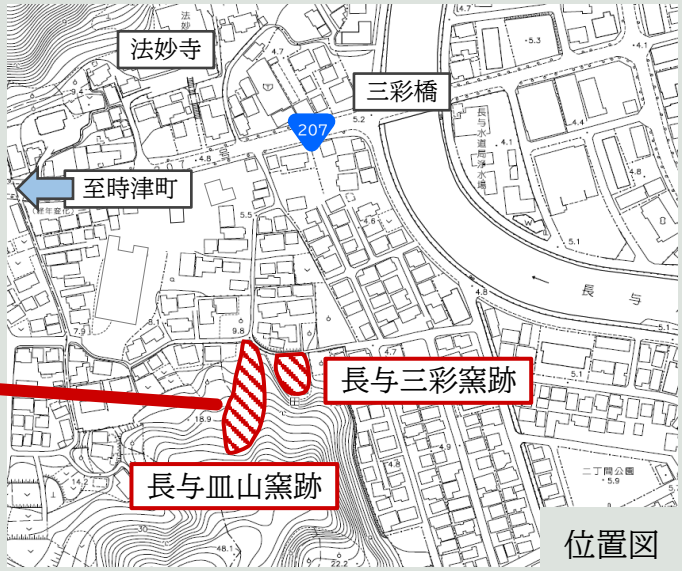
文責:長与町教育委員会　※無断転載禁止

長与皿山関係年表

和暦	西暦	出来事
寛文　7年	1667年	浅井角左衛門・尾道吉右衛門・山田源右衛門・尾道長左衛門によって長与窯開窯。
元禄　5年	1692年	この頃、長与窯廃窯か。
元禄　9年	1696年	長与中尾土、現川へ分売。
元禄　11年	1698年	長与中尾土、現川へ分売。
正徳　2年	1712年	波佐見の太郎兵衛が藩命により長与窯を再興。
寛延　元年	1748年	長与窯拡張。
安永　4年	1775年	砥部焼（愛媛大洲藩）始まる。 長与窯より陶工が指導に行き、磁器を焼くが不成功。
寛政　4年	1792年	長与陶工市次郎、「珍敷焼物」を焼く。
寛政　8年	1796年	長与皿山にチャンパン（東南アジア）焼物師居住。
文政　3年	1820年	長与窯廃窯。
天保　12年	1841年	長与窯跡畑拓き
弘化　2年	1845年	長与窯跡に渡邊作兵衛が再興。
安政　6年	1859年	長与窯廃窯。

窯跡の位置





位置図

長与皿山窯跡

上空からの写真